
天然少女と天然少年

r Y 0

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天然少女と天然少年

【Nコード】

N7896C

【作者名】

RYO

【あらすじ】

ある日突然同じクラスの女の子が家に来た。何の用かははっきり教えてくれない。

1 目 目

「彼女ほしい〜〜〜」

俺の名前は高谷敦14歳

中学2年

彼女いない歴14年!!!
いい加減ほしい…

「なんかいいことないかな〜」

とか思いながらよく家の縁側でごろついている
家でごろごろしていてもなんにもないケド…
ピンポーン…

インターホンが鳴った。

玄関に行き誰か確認すると
クラスの優だった。

「こんにちは〜誰かいますか？」
鍵を開けドアを開けた。

「……………何？」

「何って何よ〜今暇？親とかいる？」

「いないケド…つか何??俺に用??」

「うんそう。アハハいいじゃないの。」

相変わらずのんきな奴…

「入っていい？」

「……あつ……いいよ。どうぞ」
「お邪魔しまゝす！！へえ〜和室なんだ〜」
「そうだけど……ってか何なの??」
「別にたいしたことじゃないよ。
今皆の家を回ってるんだけど……
私の目標だよ！」

「……よく変わってるって言われたい??」
「なんでわかったの??」
「パツと見そうじゃん……」
「んで何で俺の家なの??」
「言いたいことがあつたから」

よくわからない子だ…

「んで何なのそれは。」

「あの〜嘘ついてゴメンね…実はね……………敦君のことがさ…」
「何?」

その時玄関から音がした。
がちゃっ！

「あつっ！！そろそろ帰るねまた来ていい??」
「うんいいけど…」
「ぢゃあまたくるね！バイバイ」
「ぢゃあ」

なんなんだあの子は…

2日目

次の日の朝……

「ふぉあ〜〜眠……」

時計を見るとまだ朝の6時30分

暑い……

朝なのにあっつい。

おかげで枕はビショビショ

パジャマはビタビタ

パジャマが背中に引っ付いた。

「冷た!!」

急いで着替えた。

その時だった。

ピンポーン……

誰か来た……大体わかったが

「敦君〜来たよ〜」

早い……どう考えても早い……

「入っていい?」

「いいけど俺まだ起きたばかりなんやけど……まあいいや入って。」

すぐに俺の部屋に行った。

「あっそういえば今日から1週間親いないからな」

「そうなんだ。じゃあ毎日来ていい?」

「いって言ったじゃん…でももっと遅くにな…」
「うんわかったありがと!!」

なんて俺はお人よしなんだ…
最悪だ…

「んで昨日言いかけたやつなんなの?」

「それ最後にして!お願い…!!」

「わかった。でも何話すの??」

「何でもいいよ。」

少し時間があいた……

「あかさ!」 「あかさあ」

「いいよ先言って。」

「う…うん。」とか言いながら話始めた。

「やっぱり昨日のことなんだケドね」

「うん。」

「敦君のことがね」

「俺のことが……何??」

「え…とえ…と。」

「だから何?」

「敦君のことが好きです!!付き合ってください。」

かなりの時間があいた…

「……………返事に困る。」

「付き合ってください!!」

「それも困る…」

「ずっと一緒にいて下さい!!」

「いいよ。俺も好きだし。」

この話までには昼までかかった。

「さっきの話の続きなんだやケドさ…付き合ってくれるの。」

「うん。」

「ありがとう! 敦って呼んでいい?」

「なんでもいいよ!!」

「じゃあありがとう敦!!」

こうして付き合うことになった。

3日目

付き合い始めて3日目。

早いどう考えても早い…

「今日も来ちゃった」

「イイよ入って。ってか何そのおつきい荷物」

「さあ〜何でしょう。」

「まあイイケド……………座って。」

「やっぱり付き合い始めると恥ずかしいね。……………」

「そう??俺そうでもないよ〜

つつかそれ何なの??」

「今日から敦ん家泊まらして?お願い!!」

「家追い出されたの!!お願いだから」

「イイケド…親帰るまでな。」

またやってしまった…

俺のばか…

いくら好きで付き合ってるからって泊めるまではダメだろ…

「……………どうしたの敦?」

「嫌なんでもない。」
「ならイイんだケド…」

そして夜がきた…

「敦？私どこに寝ればイイの？？」
「どこでもイイよ。布団あるし。」
「じゃあここでイイ？」
「イイよ。」
「ありがとー！ちょっと今日いろいろ疲れたし早速寝てイイ？」
「うん。俺も眠たいし」
「じゃあ……………おやすみ？」

10分くらいたったか…
寝息が聞こえた。

しかし俺の隣で…………
なんで俺の隣で寝てんだ！！
やっべー焦る…………
とりあえず向こうの布団に寝かそう…

深い息をつき彼女を抱えた。

そして布団に降ろしたが手が離れない…
掴まれている
しかも引っ張られてる。
顔が近い

「起きてるだろ。」

「何でバレたの??」

「当たり前やるお前目半開きやったし。」

「もうイイとこやのに。」

「……イイよ??」

すごい黙って二人は唇を重ねた。

「俺ら早いよな。まだ2日のに…」

「もう一回イイ?」

俺は返事を返さず唇を近づけた。

4日目

次の朝。

また頭がもやもやしている

それに暑い…

今の時間は……………6:00…

早い。目覚めが良すぎる。

それに…

なんで優は俺の隣で寝ているんだ!!

昨日の夜向こうの布団に寝かしたのに

いや……………

あれからの記憶が無い…

まあイヤ。

「おい優、起きろ。」

スースー……………

「起きろ優!!」

「うわっ!!びっくりした…」

「何でまた俺の隣に寝てるんだ？」

「ダメ？」

……………

なんて答えればイイんだ…

「……………明日からは向こうの布団で寝るよつに……………いくら俺のこと好きでもこれはダメだ!!」

「……………わかった。」

優は下を向き小刻みに揺れ始めた。

「なんで泣いてんだよ…」

「……………」

「やっぱりいい。一緒に寝てもいいからさっ無くなって。」

優は涙を拭ってこっちを向きニヤついた

「……………やった〜良かったあ〜」

優は喜び飛び付いてきた。

「うわっ」

俺はグラッとふらつき倒れた。

優は俺の上に倒れこみ

ずっとしがみついて離れない。

まるで誘拐され

俺が助けだしたかのように。

俺は優を離れさして立ち上がった。

そして一言いった。

「ハズイだろ……………」

多分その時の顔は赤く冷静ぶっていただろう。

だけど正直嬉しかった。

午後2:00

ずっと家にいるのもなんだしどこかに出かけた。

近くのショッピングセンターに行きブラブラと買い物をしたりして

いた。

その時前から同じクラスのやつが来た。
俺は慌てて優の手を引き逆方向に歩いた。
結構離れたところで優が聞いてきた。

「急にどおしたの？」

「あいつ。同じクラスの奴が前から来てた。」

「そうなんだっ！ってかゆっくりできないしやっぱり家帰らない？」

「そうしょっか。」

その時の外は暗く時間は7:30だった。

なので家に着いたのは8:00頃で
結構遅くまで遊んでいたことに気付いた。

5 日目

やっぱり…

やっぱり隣に寝ている。

まあイイや寝かしといてやる。

今日は結構寝た

1人起きリビングに行きテレビを付け
ソファーに座った。

テレビに映っていたニュースは
誘拐殺人事件だった。

俺には関係ないと思いつながら見ていると
二階からドタドタと音がした。

そして扉が開き優が入ってきた。

「おはよう。」

「おはよう」

と言いつつながら俺の隣に座った。

昼ごろ優は一人で出かけた。

「夕方には帰るね」

といつて出た。

ケドなかなか帰って来なかった。

心配して電話をかけたがでない

しばらくして優から電話がきた

「もしもし？優どしたの？」

「助けて。」

「優どこにいるの？」

「公園の近くの…よくわからないケド来て」「ツ・ツ・………
電話がきれた。

俺は急いで家を飛び出し公園へ走った。

公園につき辺りを見回して

一台の車が止まっていることに気がついた。

俺は走って近寄り車のドアを開けようとしたが、鍵が掛かっていた。
そして中から声がした。

「敦？助けて早く！！」

俺は車の助手席の窓目掛け石を投げた。

すごい音をたてて割れた。

急いで鍵を開け中から優を引きずりだした。

優は泣き崩れてしがみついていた。

「もお大丈夫やに。」

優はあまりの怖さに声が出ないのだろう

黙って抱き着きしがみついている。

タオルをわたし家へ帰った。

でも優は俺から離れようとせずに涙を滝のようにながし続けている。

俺は黙って優を近寄らせて

抱きしめると今まで以上に優は泣きはじめた。

それからどれだけ時間がたっても優はしがみついたまま動こうとはしなかった。

その日泣き寝入りするまでは……

6日目

優は昨日の夜の事を覚えているんだろうか。それくらいのことを考えさせる寝顔で寝ている。

顔はそうでもしがみついたままだったケド。まあイイヤもっ少し寝よ〜……

パツと目が覚めた。

時間は8:30だった

まだ優はしがみついている。

どれほど怖かったのかは俺にはわからないケド……………女の子にはそれほど怖かったのだろう。

珍しく優が目を覚ました。

「おはよう。」

「おはよう。昨日の事覚えてる？」

「昨日？なんだっけ〜」

【なんで覚えてないんだよ。】

「忘れちゃた！ゴメンね？」

「全然覚えてない？あれだけ泣いてたのに」

「うん！……！」

【やっぱりのんきだ（泣）】

「まあイイヤ起きよっか。」

リビングに下りていき昨日みたいにソファーに座る。

「あっ！！思い出した。」

「昨日の事？」

「うん。私昨日車に閉じ込めらるてたんだ。」

「そっだよ。昨日泣いてx02しがみついて離れなかったんだから。」

「うんそうだった…なんか思いだしたら怖くなってきちゃった。」

「大丈夫だよ。俺ついてるし。」

「ありがとう。」

また昼が来た。

今日は流石に出かけるのが怖いのか優は一步も外に出ようとはしなかった。

まあそれが普通だけど。

「優が泊まるのも後少しだね。」

「うん……………また泊まってもイイ？」

「イイよ。じゃあ今度は俺が泊まりに行くわあ。」

「ええ〜…イイケドノノ。」

「じゃあまた行けたらいくわ。」

そして後少ししかない日の夜を過ごした。

隣に優を寝かして。

7日目

後少ししかない時間だから
俺は眠れなかった。

優が帰ってしまうと思うと…
優の性格が少しかわったケド…
優が帰ってしまうのが怖い。
別れるわけでもないが
優が離れていく感じがしていた。

俺はそっと眠っている優を抱きしめた。
少し涙がでたケドこらえた。

やがて二度寝してしまったのか
優に起こされてしまった。
寝転んだまま……

「…あ…敦？ちよつと？」

ふつと目が覚めた。

「ん〜……うわっ！ゴメン優。」

今度は優が抱き着いてきた。

「ちよつとこのままでいてイイ？」

俺は黙ったままだ。

時間がどんどん過ぎて行くような気がしたから。

俺はその時初めて気付いた。

『優のことを好きだ』と

優は静かに頬にキスをし

素早く下に下りていった。

俺も少ししてから下りていった

服を着替えて

少し二人で出かけた。

「そついえばさ、なんで優さ誘拐されたんだろな。」

「私もわからない。急に後ろから口ふさがれてびっくりして…それから覚えてないの。」

「そつなんや…まあ無事やったしよかったよな。」

「うん。あの時助けてくれてありがとう。」

「なんか映画みたいで信じられやんだよな（笑）」

優は引き攣り笑顔で笑っていた。

やっぱり怖かったんだろう。

「そついえば今からどこ行くの。」

【そついえば決めてなかった。】

「どこ行く？」

「家帰りたい……」

「ぢゃあ帰ろつか。」

帰り道では優は腕にしっかりとつかまりながら帰って行った。

家に付き何もすることがなくなった。

二人は黙りこんでいた。

時間は9:00になっていた。

なぜだろう。

優はしがみついたままなのはわかるけど……
泣いているのは……

「優？どおしたの？」

「うっん……。大丈夫だよ……」

「なんか変やに。」

「敦に迷惑かけちゃってるよね。」

「大丈夫やに迷惑なんてかかってないよ。」

「うっんやっぱり悪いよ先に寝るね。」

そう言うと一人二階へ行った。

やっぱり俺は心配になり

二階へ行き布団に入った。

優はいつもなら俺の布団に寝ているのに
今日は向こうの布団に寝ていた。

「優。起きてる？」

「起きてるよ」

「どうかしたの？」

「大丈夫だって。」

俺はなぜか悲しくなり優のほうへと歩き優の布団に入れてもらった。

「優。正直に話して」

ようやくいつもの優らしくなり

抱き着いて泣き始めた。

「敦とねちよつと離れるだけなのにね苦しくて不安で…」

「俺も昨日そうだった。でもないつでも会えるし夏休み中は毎日会えるなと思ったんさ。」

「違うの…昨日一回家に帰ったの…そしたらね親喧嘩してね私転校することになったの。」

あまりの驚きとショックに俺は口が開かなかった。
その後も優は泣き続け泣き止むことはなかった。
俺は涙をこらえ精一杯優を抱きしめた。

ケド我慢の限界がきて俺も涙を流し始めてしまった。

最終日

優といるのも今日が最後かあ…

優は絶対あの事件以来しがみついて寝るようになった。しかもピッタリくっついて離れない。

まだ寝ている優に唇を重ねた。

優は目を覚まさない。

初めて好きになれた女の子がこんなに愛せれると思わなかった。

正気初めは遊び半分だった。

ケドなんでだろ…優に引かれてしまう。

優がいなくなったらなど考えると苦しくて息ができなくなる。

優が目を開いた。

「ん…ん…ん」

【うわ！やばいキスしたままだった。】

「ゴメン優…」

「…最近敦積極的過ぎだよ／＼／」

その時かなり恥ずかしかった。

優も真っ赤な顔をして寝ていった。

「優！！寝るなっ」

「はいっっっ！！」

寝かけている優の手を引き下に下りていった。

最後の1日くらい優のやりたいことさしてあげよ。

「優？今日何したい？」

「なんでもイイよ。外出以外なら。」

「やっぱり怖いのか？」

泣き出した。

「敦……」

「優。大丈夫やって〜」

かなりの重症だな。

「家にいよつか」

「うん……」

何をいってもダメだった。

「優。顔上げて」

スウ〜と顔上げた優の唇に

自分の唇を重ねた。

優は目をつぶったまま泣きもおダメだった。

「優泣くなつて。死んだわけじゃないんだから。」

「だって怖かったんだもん……」

その時電話が鳴った。

「もしもし敦？」

「母さんか何？」

「後10分くらいで家つくからね。」

「わかったぢゃあ。」

電話を切り優に話した。

「優もうすぐ親帰るってさ...」

「わかった。帰るね。今までいろいろありがとぢゃあもつ会えるかわからないケド.....」

「送るよ。」

「ありがと。」

優を送る道でも優はしがみつまま離れようとはしなかった。

「ぢゃあね。敦と過ごした日楽しかったよ」

「優。前向いてはなしなよ」

「ちゃんとして。」

「うん。」

前を向いた優にまた唇を重ねた。

「バイバイ優」

「待って。やっぱり無理だよ。」

「優？じゃあ俺が話付けていいの？」

「敦といられるなら全然イイ！！親と住めなくても優は敦といたい。」

「一回家行きなよ待っててやるから」

優が家に入っていった。

俺は自分の家の方向へと歩いた。

涙を流しながら。

家へ帰ると親がいた。

「敦？どうしたの」

「母さん…」

「俺って最悪だよな。」

泣きながら二階へ行き布団の上でないと電話が鳴った。

「敦、優ちゃんって子から電話よ」

急いで電話へと走った。

「もしもし？敦？転校無くなったよ！」

「本当に??」

「本当だよ!!だからこれからもずっと一緒にいてね？」

「当たり前!またいつでも家おいでな!泊まるのは無理だケド。」

「うんまた明日も行くね!!」

優も俺も一瞬にして涙が吹き飛んだ。

最終日（後書き）

『天然少女と天然少年』どうでしたか??ご意見ご感想などあれば
どんどん書いてください。いろいろと意見を取り入れよりよい小説
を書いていくつもりです。よろしくお願いします。

あの日から……

あの日から1ヶ月。

優は毎週1回は俺の家に来ている。

来ては俺の腕にしがみつき

暗い顔をする。

「優さままだ怖いのか？」

「……………」

怖いんだろうそうしといてあげよ。

その時だった。優が話し始めた。

「敦と別れた夢見た……………」

「優？絶対ないからな」

そう言ったのに……

「敦ゴメン……私やっぱり敦にあってないみたい……やから別れて。」

粘っても意味わ無いだろう。
うなずいて帰ってきた。

部屋でなき毎日泣いた。

そして

また1ヶ月がたった。

俺は優を呼び出した。

「優。お願いやもう1回付き合ってくれ！俺にあっとなるのは優だけだから。」

「私ももう一度敦と付き合いたい…敦が許してくれるなら私も付き合ってください。」

そしてまた優と俺は付き合い始めた。

それから何日も何週間も何ヶ月もたった。

ケドずっと初めて付き合った頃と同じように仲は良く

照れ臭い言い方をすると愛しあっている。

どんなカップルにも負けにくいぐらいの愛で……

どんな時間も優と二人でいるだけで楽しい。

学校も休日もなにもかも。

俺の全ては優にあるのかもしれない。

でもどんなに時間が経っても

優はしがみつき離れようとしたことはほとんど無い。

がっしりと腕に絡み付き

俺から離れない力でくっついていてる。

これからずっと

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7896c/>

天然少女と天然少年

2010年11月3日14時40分発行